
仮面ライダーカブト 其の弐

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー カブト 其の弐

【Zコード】

Z0484E

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

前作、仮面ライダー カブト の続編、あります。by・ケロ
軍曹

(前書き)

一寸エッチ。R15にした方が良いかな?と思つそんな第2弾。

「文香ー！by・カブト」

都内にある有名な私立高校に通う相樂 雅弘。彼が登校していると、背後から何者かに田隠しをされた。

「だ～れだ？」

と言つのは先日、カブトに変身してワームを殲滅した主人公の板橋 聰美である。

「聰美だろ？」

その問いに聰美は「正解」と手を退かして横に着く。

雅弘はそんな彼女を無視して歩き出した。

「ちよつ、無視しないでよもう！」

聰美はふくれつ面になつて後を追つた。

「何だよ？付いて来んなよ」

「あのね、私も同じ学校なんですけど」

「知つてるよ。だけどお前は来んな」

「何でよ？」

「だつて、お前を見ると文香を思い出すんだもん」

文香と言つのは、この前、廃墟でワームに殺された、雅弘の彼女で、聰美の双子の妹である。

「あんた、未だ引きずつてんの？ そろそろ新しいの見付けたらどうなのよ。何なら、私がなつてあげても良いけど？」

「それは却下。お前と文香じゃ性格が全然違ひ過ぎる」

「そりやそうよ。双子でも別人なんだから」

「そうだな。てか、そう言つお前は居ねえのか？」

「うーん・・・居ないわねえ」

「何だ、居ねえのか。よし、じゃあもし、好きな人出来たら協力してやるから教えてくれよな？」

「チミの協力なんて私には必要ありましねーん」

と少し頭に来そうな口調で言つ聰美。

「お前な。折角、人が好意で言つてやつてんのにそれを無駄にする気か？」

聰美はその問いを無視して背後を警戒する。

「相楽、付けられてるわ」

「え？」

雅弘は後ろを振り返るが、誰も居ない。

「何だよ。誰も居ねえじやん」

とその時、雅弘が宙に舞つた。

「相楽！」

聰美は慌てて飛び、雅弘を空中で抱き抱えて着地した。

それと同時に、白いサンガギ体が聰美の前に姿を現した。

眉を顰める聰美。

ホワイトワームは喉を鳴らして構えた。

「相楽、離れて」

と雅弘を放して背後へ退かす。

聰美はやれやれと言つ表情で溜め息を吐いて言つた。

「戦士に休みは無しか」

聰美はゼクターを召喚して手中に収めた。

「変身」

とバツクルにセットしようとすると、ホワイトワームがそれをさせまいとクロックアップして近付き、聰美を横へ吹っ飛ばした。

「キヤツ！」

壙にぶつかり、氣絶して地面に横たわる聰美。

「聰美！」

雅弘がそう言つて駆け寄ると、ホワイトワームが目の前に立ちはだかり攻撃して来た。

「うわっ！」

間一髪、雅弘はホワイトワームの攻撃を避けた。しかし、直ぐに次の攻撃が迫り、今度は避ける間も無く喰らって吹っ飛んだ。

「うわああああ！」と悲鳴を上げて宙を舞う雅弘。

ホワイトワームはクロツクアップし、雅弘に数回体当たりをして
クロツクオーバー。

「うわっ！」

地面に体を叩き付けられる雅弘。

「聰美、早く何とかしろ！」

雅弘はそう言って聰美を見るが、聰美は未だに気絶をしたままで
ある。

（やべえ、俺死んだわ）

そう思つた時、どこからともなく「Cast off」と音声が
聞こえ、飛散したアーマーの一部が飛んで来てホワイトワームを吹
つ飛ばした。

雅弘は驚き、アーマーが飛んで来た方向を見た。その先には、と
ても大きな青いクワガタが一本足で立つていた。ガタックである。
クワガタ？ と疑問符を浮かべる雅弘。

それと同時に「Change stage beetle」とガ
タックホーンが起き上がり、ガタックの目、コンパウンドアイが発
光する。

ホワイトワームは立ち上がり、「シャー」と喉を鳴らして、ガタッ
クに襲い掛かるが、ひらりとかわされて反撃を受け蹠跟めく。

ガタックはその隙に腰のベルトに装着したガタックゼクターのフ
ルスロットルを三回押し、ゼクターホーンを展開し、パワーをチャ
ージして元に戻す。

「Rider kick」

と音声が鳴ると同時にガタックはホワイトワームに回し蹴りを放・

・・とうとしたが、背後から何者かに攻撃され、吹っ飛んだ。

「人の獲物に手出さないでくれる？ 蜂さん」

そう言ってザビーを見るのはカブトである。

カブト・・・ とガタック。

「おい、どう言つつもりだ？」

ザビーは立ち上がりそう訊ねた。

そこへ、ホワイトワームがクロックアップで突っ込んで来る。

「はっ！」

カブトは頃合を見計らい、カブトクナイガンの銃身を握つて刃をホワイトワームに突き刺した。

その瞬間、ホワイトワームは爆裂霧散した。

「どう言つつもりつて、獲物を捕られるのを防いだだけよ
じゃあ　とカブトは言つて雅弘の方へ歩いて行く。

「待て！」

ガタックに引き留められ、カブトは振り向いた。その瞬間、ガタックが飛び蹴りを放つて來た。

カブトは吹つ飛ばされ、地面を跳ねて転がつた。

「キヤストオフ」

カブトを素早く立ち上がつてゼクター ホーンを展開した。

「C a s t o f f」

アーマーが吹き飛び、カブト ホーンが起き上がる。

「C h a n g e b e e t l e」

と音声が鳴り、ライダーフォームへ移行完了。

カブトは三つのフルスロットルを順番に押し、ゼクター ホーンを反対側へ倒した。

「ライダー・・・キック」

とゼクター ホーンを元に戻し、ガタックに駆けて飛び蹴りを放つ。

「うわっ！」

必殺技を喰らつたガタックは吹つ飛び、地面を転がつて変身が解けた。

「ベルトは没収よ」

カブトはそう言つと、ガタックの資格者に近付いてベルトを奪取した。

「おい、返せ！」と資格者。

「五月蠅いわね。撃ち殺すわよ？」

とカブトクナイガンの銃口を資格者に向けるカブト。

資格者は息を飲んだ。

「なんてね」

カブトはクナイガンを仕舞い、雅弘の下に移動した。

「行くわよ、相楽」

言つてカブトは雅弘と去つていつた。

人気の無い通りに、一台のワゴン車は在つた。

そのワゴン車に、黒いスーツを身に纏つた一人の男が、今にも倒れそうな足取りで近付いて来て、ドアを開けた。

すると中に乗つっていた女性が驚いた顔で訊ねた。

「加賀美くん、どうしたの！？」

「べ、ベルトをつ、ガタツクのベルトを盗られました！」

「何ですって！？」

「加賀美、誰に盗られた？」

「そう訊ねたのは40代くらいの男性だ。」

「カブトです！」

加賀美と呼ばれる男の言葉に、一人は眉を顰めた。

「岬、シャドウの矢車に連絡だ」

「解りました。直ぐに」

と女性は携帯を取り出して番号を入力した。

「矢車くん？ 岬だけど、一つ頼みみたい事があるの」
電話の向こうで、矢車は答える。

「頼み？」

「ガタツクのライダーベルトがカブトに盗られ・・・」

そこまで言い掛けた所で、矢車が搔き消す様に言つた。

「悪いが無理だ。俺も、カブトにザビーゼクターを奪われてしまつた」

「えつ・・・」

「どうした、岬？」

「田所さん、矢車くんもライダーブレスを奪われたそうですね」

「何? 岬、ちょっと代われ」

岬と言つ女性は田所と言つ男性に電話を渡した。

「田所だ。カブトに奪われたと言つのは本当なのか?」

「本当です。あれは確かにカブトでした。けど・・・」

「けど、何だ?」

「ライダーフォームの色が違つたんです」

「色? どんな色だ」

「黒です」

「なつ、黒だと!?」

「知つてるんですか?」

「本部から聴いた事がある。カブトのベルトは一つある、と。しかも一つは何者かに盗まれたそうだ」

「ではもう一つは?」

「正式な資格者の下に回された。名は板橋 聰美。住所はすまんが調べてくれ。こっちでは判らない。兎に角、その人と会つて何とかしほ。じゃあな」

そう言って田所は電話を切つた。

洋食店ビストロ・ラ・サルに、聰美は来ていた。

「何にするんだ?」

とアルバイト店員、田下部 くわかべ ひよりは言つた。

「鯖の味噌煮お願ひ」

「・・・・・・」

ひよりは無言で聰美を見詰める。

「何よ?」

「そんなの無い」

「あるでしょ? 私の鼻は誤魔化せないわ。きっと、まかないで作つ

た物ね」

聰美が言つと、厨房から店長の竹富^{たけみや}弓子^{ゆきこ}が顔を出して言った。

「ひよりちゃん、出してあげなよ」

ひよりは渋々と厨房に入つて鯖の味噌煮を作り、聰美的前に置いた。

聰美は無言で箸を取り、鯖の味噌煮を食べる。

「美味い」

それだけ言つて黙々と食べ続ける聰美。

そこへ、新たな客がやって来る。

「ひより、いつものを頼む」

客はそう言つと席に着いた。

「悪い、天道。鯖はあれで最後なんだ」

ひよりはそう言つて、聰美が美味しそうに、と言つた本当に美味しい食べている聰美的鯖を指差した。

天道と言う客はそれを見て肩を竦めた。

「あげないわよ」

聰美は天道に向かつてそう言つた。

「仕方がない。松輪サバの丸特に・・・」

天道がそう言い掛けた所で聰美が搔き消す様に言つた。

「松輪サバの丸特は全部買い占めたわ」

「何?」

「じちやうさま」

聰美はそう言つと、お金を置いて出ていった。

「待て!」

天道が立ち上がり後を追つて外に出て捕まる。

「何よ?」

「その鯖、一匹で良いから譲ってくれ」

「食べたいの?」

「ああ」

「来て」

言つて聰美が歩き出すと、その後ろを天道が付いて歩き出す。

家に着くと、門の前にスースを身に纏つた男が居た。

「誰？」と聰美は訊ねる。

「この家の者か？」

「そうよ。何か用？」

男は聰美の後ろに居た天道を見ると耳打ちで「二人切りで話しがしたい」と言つ。

「解つた」

「一寸待つて」と天道に言つと、聰美は男と共に家の中へ入つた。

「で、話しつて何？」

「单刀直入に言つ。板橋聰美と言つのは君か？」

「そうだけど・・・あんた、誰？」

「俺はシャドウの矢車^{やぐるま}想だ」

「ZECTの人？」

「ああ。君に頼みがある。ザビーゼクターを取り返して欲しいんだ」「どうして？」

「盗られたんだ。もう一人のカブトに」

その言葉に聰美は眉を顰める。

「悪いけど断るわ」

聰美はそう言つと矢車を追い返し、入れ替わりに天道を家に入れ、台所に案内した。

そこには丸特と書かれた大量の発泡スチロールが置いてある。

聰美はその内の一つを開け、鰯を一匹取り出してビニール袋に詰め、天道に渡した。

その時、玄関が開かれ、何者が入つて來た。

聰美は誰かと思い、玄関へと向かつた。そこには、自分と同じ姿の少女が居た。

「誰？」

「あんたこそ誰よ？此処は私の家よ」

その言葉に聰美はカブトゼクターを召喚する。

「外に出ようか？」

そう言つと、玄関に立つ少女は外に出て行つた。

聰美はそれに続き外へ出て少女と向き合つた。

「あなた、ワームね」

聰美の言葉に少女はニヤリと笑う。

「あなたは此処で死んで私の中へ生きるのよ」

「生憎、私はワームになる気は更々無いわ。此処であんたを潰して終わりよ」

聰美はそう言つとゼクターをベルトに填めてカブトに変身。少女に襲い掛かった。

少女はひらりと身をかわし、黒いカブトゼクター召喚した。

「成る程。あんたがもう一人のカブトって訳ね」

「カブトは私一人で良い」

言つて少女はゼクターをベルトにセットした。

「HENSHIN」

システムが起動し、少女はコンパウンドアイが黄色のカブト、ダーケカブトに変身した。

そこへ、天道が家から出て来る。

「ほお、カブトか」

天道はそう言つと手首に装着しているライダー・ブレスを示した。

「何？」と二人のカブト。

「俺も混ぜて貰いたいね」

言つて天道は「一カサスのゼクターを召喚し、ブレスにセットした。

「HENSHIN」

システムが起動し、天道は「一カサスに変身した。

「Change beetle」

と変身完了の音声。

「クロックアップ」

「コーラスはバックルのトレーススイッチを押した。

「Clock up」

と、音声が鳴り、一人の前から姿が消え、同時にダークカブトの体が宙に舞う。

「キャストオフ」

とゼクターホーンを展開するカブト。

「Cast off」

アーマーが吹つ飛び、カブトホーンが起き上がり「Change beetle」とライダーフォームへ移行完了の音声が鳴る。

「クロックアップ」

カブトはサイドバックル叩いた。

「Clock up」

と音声が鳴り、クロックアップが発動。

「行くぞ」

「コーラスがそう言ってダークカブトをカブトに蹴り飛ばした。カブトは三つのフルスロットルを素早く順番に押してゼクターホーンを倒して「ライダー キック」と元に戻す。

「Rider kick」

音声が鳴ると同時に、カブトは飛んで来たダークカブトに回し蹴りを叩き込んだ。

「Clock over」

と時間の流れが戻り、ダークカブトが吹つ飛んで地面を転がる。

「くつ・・・」

ダークカブトは今にも倒れそうな足取りで立ち上がり、ゼクターホーンを展開する。

「Cast off」

アーマーが吹き飛び、カブトホーンが起き上がる。

「Change beetle」

とライダーフォームへ移行完了の音声。

「怒ったわ」

ダークカブトはそう言つとサイドバッклを叩いてクロツクアツブし、コーラサスとカブトを吹つ飛ばし、宙に舞つた二人をクナイガンで叩き付けた。

「うわっ！」

「うつ！」

地面に叩き付けられる二人。

（こいつ、強い・・・）

カブトは何とか立ち上がるが、吹つ飛ばされ、地面を転がる。

「クロツクアツブ」

カブトはサイドバッклを叩いた。

「Clock up」

音声が鳴り、周囲の物体の動きが遅くなる。

カブトは立ち上がり、迫るダークカブトを受け止めた。

「あなた、往生際が悪いわよ？」とダークカブト。

「それが癖なのよ！」

カブトは素早くクナイガンを装備してダークカブト斬り付ける。攻撃を受けたダークカブトが躊躇めき、隙を突いてカブトが三つのフルスロットルを押してゼクター・ホーンを倒し「ライダー・キック」と元の位置に戻す。

「Rider kick」

必殺技発動の音声が鳴り、カブトは回し蹴りを放つた。

「Clock over」

時間の流れが元に戻り、ダークカブトは吹つ飛んで地面を転がり、変身が解けた。

そこへ追い打ちを掛けるように、カブトがクナイガンを少女の胸に投げて刺した。

カブトはクナイガンの刺さつた少女に近付き訊ねる。

「仲間から聽いてるわ。ライダーシステムを奪つたのは貴方ね？」

「そうよ」

「ベルトは何処にあるの？」

「貴方には教えないわ。けど、私と入れ替わってくれるなら教えても良いけど」

「それは遠慮しとくわ。この歳で未だ死にたくないから。で、盗んだライダーベルトは何処にあるの？」

少女はその問いに口を開いたが、しかし、言葉を発する前に爆破裂霧散してしまった。

「その黄金のライダー」

とカブトはコーラカサスに向いて言ひつ。

「貴方、手伝いなさい」

「断る」

「ちよつ、未だ何も言つてないでしょー？」

「お前の言いたい事は大凡見当は付く。ライダーシステムの搜索を手伝え。そんな所だろ」

「・・・良いわ。鰐返して頂戴」

「何？」

「聞こえなかつた？鰐返して」

「嫌だね」

「じゃあ手伝つて」

「やれやれ。鰐の為だ。仕方ない」

「」カサスはそう言つと変身を解除。天道に戻つた。
それに続き、カブトも変身を解除した。

「さて、何処から搜す？」

「そうだな。一番手つ取り早いのは先刻の奴が使つていたゼクターに案内して貰うと言う方法だが・・・」

「その手があつたわ」

聰美は傍らに落ちているダークカブトのベルトを拾つて装着した。

「来い そう念じるが、ダークカブトは現れない。

「現れないわよ？」

「当然だろ。変身すべき資格者はゼクターが決めるんだからな」

「じゃあ何？あのゼクターは人間じゃなくてワームを選んだと？」

「そう言つ事になる」

「何よそれ！？」

聰美はダークカブトのベルトを外して地面に投げ付けた。
その時、聰美の携帯が鳴り響いた。

聰美は取り出して応答する。

「はい」

「聰美か。俺だ、雅弘だ。助けてくれないか？」

「どうしたのよ？」

「ワームだ。ワームに囮まれたんだ」

「今どこに居るの？」

「何処かの廃工場だと思つけど、兎に角直ぐに来てくれ！」

雅弘はそう言い残し、電話を切つてしまつた。

聰美は家のガレージに駆け込むと、CBR1000RRのエンジンを掛け、ヘルメットを被つて跨がり、発進した。

「システム捜しは任せたわ」

聰美は天道にそう言い残し去つていつた。

天道は「一寸待て！」と言つが、もう彼女には届かない。

都内の何処かに佇む不気味な廃工場。雅弘はその工場の中でワームに襲われていた。

雅弘は可能な限り逃げ続けたが、ついには逃げ場を失つて囮まってしまった。

（聰美の奴未だかよ！？）
と心中で叫ぶ雅弘の前に彼に擬態した蚊の能力を持つキュレックスワームが現れた。

「お、俺を殺るつてのか？」

雅弘は震えた声で擬態雅弘に訊く。

「ああ、お前には消えて貰う」

擬態雅弘が答えると、足音が聞こえてきた。そしてそれは段々と大きくなつてくる。

「誰だ！？」

ワームたちが一斉に振り向くと、ジーンズのポケットに手を突っ込んで歩いてくる聰美が居た。

「どつちが相楽？」

聰美は立ち止まり、そう訊ねた。

「俺が雅弘だ！」

二人の雅弘が同時にそう叫ぶ。

「判らないわね」

聰美はそう言つとゼクターを手にして「変身」と、バッклにセットする。

「HENSHIN」

ライダーシステムが起動し、カブトに変身する。

ワームたちは一斉にカブトに襲い掛かつた。しかし、カブトのキヤストオフにより飛散したアーマーを喰らい、全員消滅する。カブトは一人の雅弘を暫し見詰め、サイドバックルを叩いた。

「Clock up」

その瞬間、雅弘の前からカブトの姿が消え、同時に「Clock over」と擬態雅弘の背後に現れた。

擬態雅弘は「聰美！」と辺りを見回し、背後にカブトの姿を見付けた。

「どうやら貴方が本物みたいね」

目の前の擬態雅弘を本物と判断したカブトは、雅弘の方を向いて近付き攻撃した。

雅弘はひらりと身をかわして反撃する。

その傍らで、擬態雅弘が北叟笑む。

（そうだ。そうやって人間を殺すんだ。そうすればお前は資格を失う。そしてこの俺に殺されるんだ）

擬態雅弘がそう思つと、カブトが攻撃を止めて振り向いた。

「何を思つてゐるかは知らないけど、私の目は誤魔化せないわよ」「何？」

「あんた先刻、私が変身する前に一瞬、擬態を解いたでしょ？」

「待て、何を言つてゐんだ。俺は本物だぞ？」

「否、偽物よ。あんたは先刻、クロックアップして擬態を解き、左腕の棘で相楽の体内にウイルスを注入し操り人形にした。全く、姑息な事してくれるじゃない」

「まさか貴様！？」

「そう、そのまさかよ」

「こ、この裏切り者め！」

擬態雅弘はキュレックスワームに変貌してカブトに襲い掛かつた。カブトはひらりと身をかわして蹴り飛ばした。地面を転がるキュレックスワーム。

「ふつ」

「何が可笑しいのよ？」

「お前、女を殺しただろ。先刻」

「・・・・・・

「そいつ、人間だぞ」

その言葉にフルスロットルを押そうとしたカブトは「何ですって

！？」と感嘆の声を上げた。

「板橋 文香。そいつの名だ」

「文香！？」

「ああ、そうだ」

「そんなバ力な！だつて文香はこの前ワームに殺されて・・・！」

「違う。あれはアラクネアワーム・フラバスの手下が擬態したものだ。本物の文香は俺がウイルスを注入して操り、ダークカブトの力を授けてライダーシステムを集めさせていた。そして、お前のを取りに行き、そこでお前に殺された。その証拠に奴はワームにならなかつただろ？」

その言葉にカブトは拳を強く握り締めた。

「・・さない」

「ああ？」

「人を殺して擬態するだけでなく、人を操ってその人を別の人々に殺させるなんて、絶対に赦さないわ！」

言つてカブトはフルスロットルを押し、ゼクターホーンを倒し「ライダー・キック」と元に戻してキュレックスームに近付く。

「お前も殺して擬態したんだろうが」

「違う！」と回し蹴りを放つカブト。

「私は殺してなんかいない！」

「じゃ、じゃあ何故、擬態した？」

「殺されたのよ。目の前で別のワームに。当初、聰美は私が殺して擬態する予定だった。でも、そうする前に私は、蠍のライダーと対峙して殺され掛けた。そこにあの娘が来て、カブトに変身して私を助けてくれたのよ。以来、私は彼女を恩人として慕う様になつた。そしていつか恩を返そうと思っていた矢先、殺された。だから私は聰美に擬態し、聰美的意志を継いだ。それがあの時、私があの娘に出来る恩返しだつたから」

「情が移つたと言う訳か。最低な野郎だ。我々の本来の目的を無視して人間の味方に付くとはな」

「最低なのはそつちよ！」

とカブトクナイガンを手にして斬り付けるカブト。

「お前は、お前だけは絶対に赦さないわ！」

カブトはクナイガンを大きく振り被り、勢いよくキュレックスームの胸に刃を突き刺し、すぐに引っこ抜いた。

「この程度で死なれちゃ困るわ！あんたにはもっと苦痛を味わって貰わなきゃ私の気がすまない！」

と今度はクナイフレームを取り出してクナイカッターを收め、アバランチブレイクを放つ。

「未だよ！未だ足りないわ！」

クナイガンを持ち替え、アバランチシユートを放つ。

「トドメ！」

カブトはフルスロットルを押し、ゼクター ホーンを倒してパワーをチャージし、元に戻して「R i d e r _ k i c k」とキュレックスワームを宙に蹴り上げ、連續キックを繰り出し、最後に飛び上がって回し蹴りを放った。

その瞬間、キュレックスワームは大爆発を起こした。同時に、操りの効果が切れた雅弘が「うわっ」と爆風によつて吹き飛ばされる。カブトはサイドバックルを叩き、クロックアップして雅弘を抱えると廃工場から脱出した。

「C l o c k _ o v e r」

時間の流れが戻り、廃工場は跡形もなく吹っ飛んだ。

「あれ、生きてる？」と雅弘。

カブトは雅弘を降ろして変身を解いた。

「て言うか俺、今まで何してた？聰美が来てくれた所までは覚えてんだけど、その先是……」

「相楽、世の中には知らない方が良い事もあるのよ」「はあ？」

疑問の表情をする雅弘。

「それよりさ、ライダーシステムの事聞いてない？」

「お前、自分で奪つて俺ん家に隠したの、もつ忘れたのか？」

「否、それ私じゃないから」

「え、まさか？」

「そう、そのまさか」

「じゃあ今朝、俺と登校したのもワームか！？」

「登校つてあんた、今日は土曜日よ。まさか補習で？」

その問いに雅弘は「五月蠅え！」と答えて走り去つていった。

「あ、一寸待ちなさい！」

聰美は愛車のエンジンを掛け、ヘルメットを被つて発進。後を追い掛けた。

やがて聰美は追い付き、前に回り込んで行く手を阻んだ。

「メットもう一個あるから乗りなよ」

言つて聰美はヘルメットをもう一つ取り出して雅弘に渡した。

雅弘はヘルメットを被り、聰美の後ろに跨がつた。

「しつかり掴まってよ」

聰美がそう言つと、雅弘が腕を回してきた。

「にゅっ！」と音がし、聰美は頬を赤らめる。

「一寸あんた、何処触つてんのよ！？」

「何処つて、胸だけど」

「殴るわよ？」

「何で！？」

聰美は「はあ」と溜め息を吐いて肩を竦めた。

「あんたには羞恥心つてのが無いの？」

「そんなの無い！」

「威張つて言つなー降りろ！」

「嫌だ」

「そつ、じゃあ覚えておくのね」

「一寸待て、降りる」

雅弘はそう言つて降り・・・ようとしたが、発進されて降りそびれてしまつた。

「ちよつ、降りる言つたろ！？」

「決定事項よ。取り消しは出来ないから、覚悟しておくのね」

「マジかよ・・・」

「着くまでたつぶり堪能しておくのよ？その分、倍にしてあげるから

「

「それは嫌だ！て言うか、暴力は止せ！」

「違うわ。skinshipよ」

「お前な、あればただの暴力としか言わねえよ

「暴力ねえ・・・私、暴力は嫌いだわ」

「じゃあ殴るなよ」

「だから、skinshipって言つてんでしょうが！」

「お前のスキンシップは暴力なんだよ」

「・・・・・」

聰美は無言を回答に運転に集中した。

「無視すんなよ！？」

「五月蠅いわね。今、運転してるから話し掛けないで」

聰美の言葉に、雅弘は言葉を失つた。

その後、自宅に着いた雅弘は、聰美にフルボッコにされたと言つ。

(後書き)

アドオンを入れた為、Firefoxがルビタグに対応する様になった。これでルビの表示が確認出来る様になった訳だ。と言うのは置いといて、次回はドレイク（風間 大介）が出ます。多分。前作のURLは下記に記載。携帯は案内ページからお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0484e/>

仮面ライダーカブト 其の式

2010年10月8日14時10分発行